

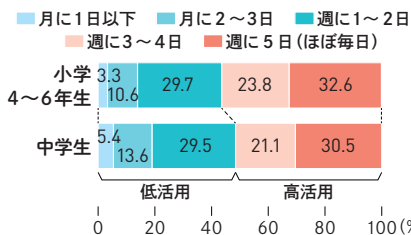
# ICT活用は「個別最適な学び」をどのくらい実現しているか

2021年1月の中央教育審議会の答申\*では、「個別最適な学び」において、「学習の個性化」と「指導の個別化」が重要とされ、その推奨環境としてICTの活用が位置づけられた。最新の2023年の調査から、「個別最適な学び」にかかわるICT活用の状況を見ていく。

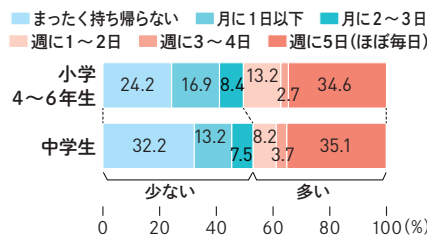
## 1 ICT機器の利用頻度は学校によって差があり、個に応じた指導は約2割

図1 ICT機器の活用状況

① 学校（授業）でのICT機器の利用頻度



② 学校で利用するICT機器の持ち帰り頻度



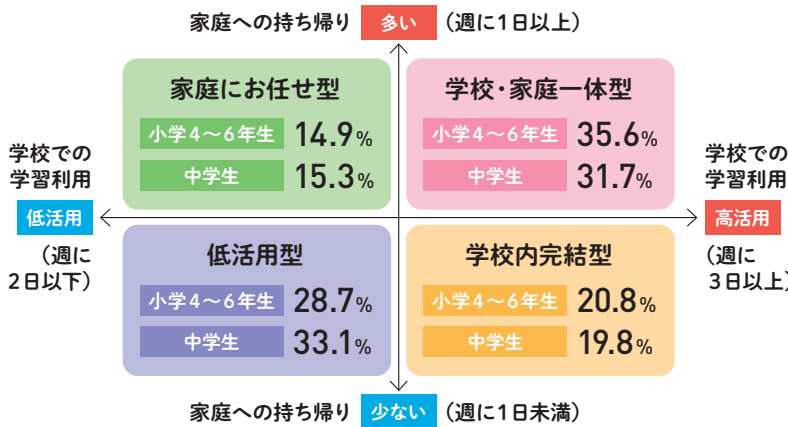
注) 「学校での勉強でICT機器を使っていない」と回答した子ども(小学4～6年生で0.6%、中学生で1.9%)には尋ねていない。

### 小・中学生の約3割がほぼ毎日利用

まずICT機器の利用状況を見ていく。学校でICT機器を「週に5日（ほぼ毎日）」利用している子どもは、小学4～6年生、中学生ともに約3割だ(図1①)。利用頻度は「週に1～2日」以下と「週に3～4日」以上で二分され、「週に1～2日」以下を「低活用」、「週に3～4日」以上を「高活用」と定義した。

一方、学校で利用するICT機器を「週に5日（ほぼ毎日）」持ち帰る子どもは、小学4～6年生、中学生とも約35%だ(図1②)。持ち帰りは「月に2～3日」以下と「週に1～2日」以上で二分され、「月に2～3日」以下を「少ない」、「週に1～2日」以上を「多い」と定義した。

図2 学校のICT機器の活用タイプ

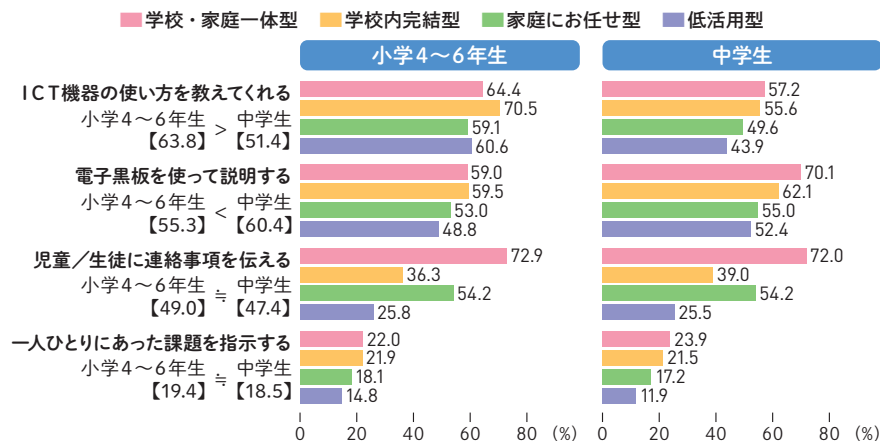


### 学校利用と家庭への持ち帰りに相関あり

「学校での学習利用」と「家庭への持ち帰り」に関連はあるのか。学校での学習利用頻度を横軸に、家庭への持ち帰り頻度を縦軸に置き、学校のICT機器の活用タイプ(以下、活用タイプ)を4つに分類した(図2)。小学4～6年生、中学生ともに学校で高活用かつ持ち帰りも多い「学校・家庭一体型」は3割強である。学校での学習利用と家庭への持ち帰りにはやや相関があり(図表省略)、学校での利用頻度が高い学校は、家庭への持ち帰り頻度も高い傾向にあった。

教員から受けているICT機器を使った指導を見ると、小学4～6年生では「ICT機器の使い方を教えてくれる」、中学生では「電子黒板を使って説明する」が多い(図3)。一方で、「個に応じた指導」を示す「一人ひとりにあった課題を指示する」は、小・中学生ともに約2割にとどまった。

図3 学校のICT機器を使った教員の指導(全体・活用タイプ別)



注1) 「よくする」+「ときどきする」の%。注2) 【】内は、小学4～6年生あるいは中学生の全体の数値。

\* 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)。

出典 「子どものICT利用に関する調査 2023」

子どもの学校と家庭におけるICT利用の実態と意識を捉えることを目的に、小学4年生から高校3年生までのおよそ9,000人を対象として、2023年2～3月に行った調査。東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトの調査モニターに対して実施。

◎詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。  
<https://berd.benesse.jp/special/childedu/>



データ解説

ベネッセ教育総合研究所  
主任研究員

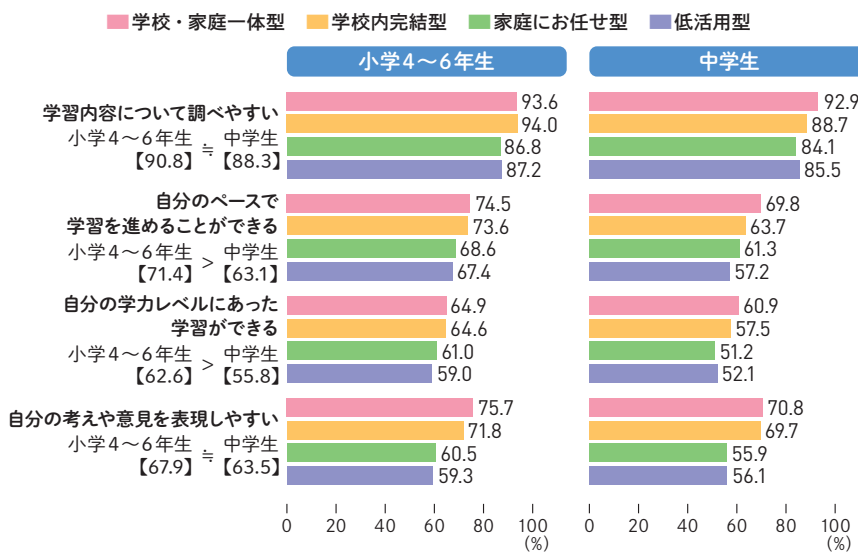
松本留奈 まつもと・るな



乳幼児から高等教育まで幅広い教育段階において、子ども、保護者、教員を対象とした意識や実態の調査研究に多数携わる。自律的学習者が育まれるプロセスと、そこに対する適切な支援のあり方に関心を持っている。

## 2 ICT活用では、個に合ったペース・難易度で学習できる点が評価される

図4 学校のICT機器を使った学習に対する評価(全体・活用タイプ別)



注1)「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。 注2)【 】内は、小学4～6年生あるいは中学生の全体の数値。

### 「学習の個性化」は学校での活用が鍵

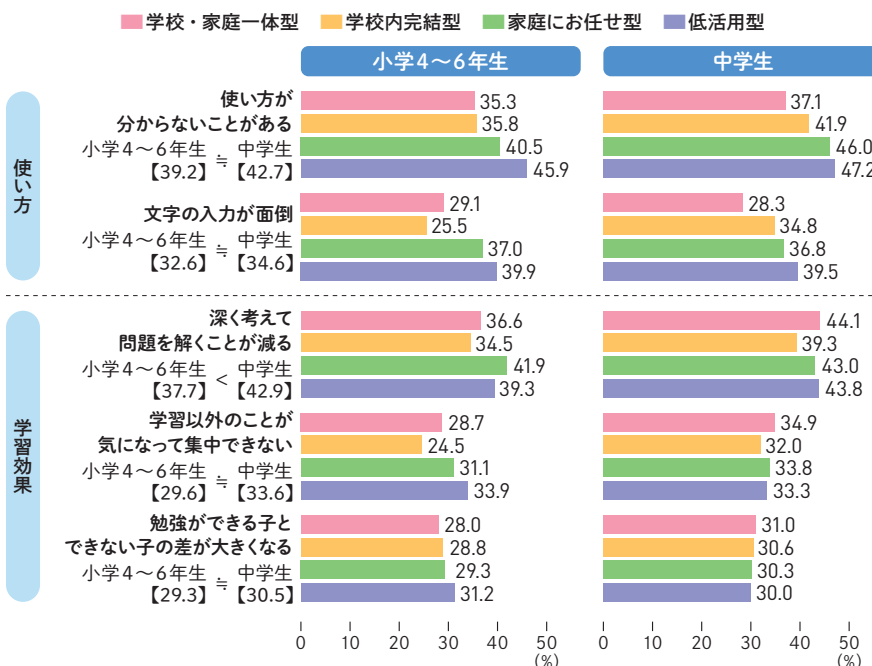
学校のICT機器を使った学習に対する評価について、「学習の個性化」に関する4項目の結果を見ていく(図4)。ICT機器を活用すると「学習内容について調べやすい」と、大半の小・中学生が回答した。自分のペースや難易度で学習できる項目の肯定率も、6～7割に上る。活用タイプ別に見ると、「学校・家庭一体型」「学校内完結型」では、4項目すべての肯定率が高い。「学習の個性化」に近づくには、学校での活用をさらに充実させることが鍵と言えるだろう。

### ICT機器を使うことで生じる懸念も

学校でのICT機器を使った学習への懸念を活用タイプ別に見ると、学校での学習利用が低活用の「家庭にお任せ型」「低活用型」では、「使い方が分からないことがある」「文字の入力が面倒」といった使い方に関する懸念が多い(図5)。一方、「深く考えて問題を解くことが減る」「学習以外のことが気になって集中できない」といった学習効果に関する懸念は、小学4～6年生では「家庭にお任せ型」「低活用型」で多いものの、中学生では活用タイプによる差は少ない。「学校・家庭一体型」では、小学4～6年生より中学生の方が学習効果に関する懸念が多く、中学生になると懸念が生じる様子が見えてくる。

学校・家庭の場でよくICTを活用している子どもほど、教員からの「個に応じた指導」が多く、「学習の個性化」への適性を感じていることが分かった。ICT活用の中で生じる子どもたちの懸念に配慮しながら、学校・家庭での一体的な導入が進むことで、「個別最適な学び」に近づくことができるだろう。

図5 学校のICT機器を使った学習に対する懸念(全体・活用タイプ別)



注1)「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。 注2)【 】内は、小学4～6年生あるいは中学生の全体の数値。